48

十五年戦争と日本民族衛生学会（協会）（その三）

――学会名等をめぐる戦後の論争――

莇　昭三
社団法人石川勤労者医療協会
城北病院

［目的・研究方法］　戦後、日本民族衛生学会はその研究課題や学会名、機関雑誌名に関して長い論争を繰り返してきたが、今回はその経過と特徴を分析したので報告する。方法は同学会の機関雑誌「民族衛生」の論文、討論記事等の分析を中心とした。

［結果］学会の戦後論争の観点を要約すると、①、②の二点に集約される。

①学会の「研究課題」を巡って。

＊戦前の学会の主要な課題は「人種衛生、すなわち優生運動をするということ」（福田邦三、民族衛生二四巻一号）であった。

＊終戦直後に強調された学会の目標は「無謀の戦い、：二三軍閥の野望によりて累を世界に及ぼし、：優生問題の研究と普及に或は断種法制定の促進に、：我が協会の任務の愈々重大且つ大なるものあることを自覚し、：」（永井潜、一九四六年）と、依然として戦前の学会の目標を提示していた。

＊その後の目標転換。理事長（当時）福田邦三は「民族衛生という言葉を定義しなおして日本民族の特殊事情に焦点を合わせた衛生という意味：を理事会に提案、了承を得た」と述べている（「民族衛生」二四巻一号、一九五八年）。その後第二四回総会でシンポジウム「民族衛生のいろいろの角度からの展望」が開催された。

＊一九九一年、「施設や雑誌の名称が時代の文脈からはずれてしまうならば、誤解をまねく恐れがある」として田中平三は学会名を「日本人類生態学会」と改名提言、一方「民族衛生の名称を支持する」（豊川祐之）という反論も発言され、一九九二年五七回総会、五八回、五九回と連続して研究課題と学会名をめぐる「学

術サロン」が開催された。しかし必ずしも合意点を確認するに至らなかった。

②学会名、機関雑誌名の変更論議を巡って

＊学会発足から一九五八年までは、日本民族衛生学会は「日本民族衛生協会」の学術部であり、英文名は規定していない。

＊一九五八年、学会が「協会」から分離し、日本民族衛生学会として独立、「民族衛生」誌も学会の機関誌となった。学会の分離を機会に、一九五八年二三回総会から学会名の英文名が決められ（「Japanese Society of Race Hygiene」）、「民族衛生」誌は第二四巻第一号より「Race Hygiene」と呼称された。

＊その後、「Race」という文言に関連して多くから異見がだされたが、その事情を「：例のナチが使ったRassenhygieneという言葉のいろいろな意味のマイナス面を将来のためもう一度検討する必要があるだろう」（福田邦三）とされ、論議の末に学会名は従来どおりの「Japanese Society of Race Hygiene」、「民族衛生」誌は改名されて「Human Ecology and Race Hygiene」（第三十巻第一号、一九六四年一月）となった。

＊その後も学会の研究課題とも関連して「民族衛生」論が論議され、一九八二年第四七回総会で日本民族衛生学会の英文名を「The Japanese Society of Health and Human Ecology」、「民族衛生」誌は「The Japanese Journal of Health and Human Ecology」と再改定された。石河利寛は「福田邦三先生は：国家政策と結び付きやすい優生学的な考え方を採用されなかった」と述べている（民族衛生、四八巻五号）。

［結論］「日本民族衛生学会」の歴史を振り返ると、「民族衛生」という文言を巡り過去の学会活動、現在の学会活動、そして将来の課題を巡って、時々に絶えず論議してきたことがわかる。それは十五年戦争中に日本の「優生運動」推進を掲げて誕生した「学会」の影が、戦後正確に総括されないまま約七十年を経過したことが、今も「学会」の運営に投影していることを示しているようである。同時に、この時々の論争も「十五年戦争は何であったか？」を医学会として論議してきた数少ない学会の一つであるともいえる。